

美濃焼の誕生（8-12 世紀）

美濃焼の歴史は、5 世紀に中国から朝鮮半島を経由して穴窯がもたらされたことに始まる。美濃地方で穴窯が使われるようになったのは、7 世紀のことである。日本では紀元前 13000 年頃から単純な竪穴式の窯が使われていたが、より大型で高度な穴窯は、高温で大量に焼くことができるため、耐久性に優れ、水がしみこまない陶器を作ることができるようになったのである。

この初期の穴窯で焼かれた陶器は「須恵器」と呼ばれた。当時はまだ釉薬を使い始めていなかったもので、下の容器と蓋のようにシンプルなマットグレーに仕上がっていた。しかし、9 世紀になって、隣国の猿投の陶工たちが、長く焼いていると自然の灰釉が斑点状に現れることに気が付いた。この釉薬は、灰に含まれるシリカやカルシウムなどの無機成分が粘土と溶け合ってきたものである。そこで、木灰を使った原始的な釉薬を焼成前にかけるようになった。この釉薬は、陶器の強度や防水性を高めるだけでなく、思いがけない模様や質感を生み出し、それぞれの作品をユニークなものにした。下の「長頸壺」はその一例である。

猿投の灰釉陶器は高級品であり、高い需要があった。美濃の陶工たちはこの需要に着目し、自ら灰釉陶器を製作して販売するようになったのである。10 世紀初頭には、美濃は猿投を抜いて国内最大の生産地となった。